

141 APTT による Lupus Anticoagulant の測定と ELISA 法の検討

大阪大学医学部 産婦人科

大槻芳朗、佐田博之、西野栄里子、岩田以津子、
岡本栄作、光田信明、高木 哲、杉田長敏、
谷澤 修

【目的】Lupus Anticoagulant (LA) 保有者は、流産を繰り返すことが知られている。従って、習慣性流産（習流）患者・妊婦においては、LAのスクリーニングが必要と考えられるが、その頻度については検討されていない。我々は、APTTによるLAの測定の他に、ELISAを用いた抗体スクリーニング法を開発し、臨床応用を試みた。

【方法】対象は、習流患者20名、妊娠初期の妊婦400名である。LAのスクリーニングには、通常濃度及び20倍希釈のプラテリンを用いたAPTTで行った。APTT値で異常の見られた場合、被検血漿に正常血漿を加えた値も測定し、+2SDを越えるものをLA陽性とした。また、マイクロプレートにリン脂質を結合させたELISA法を開発し、スクリーニングに用いた。LAを有する習流患者に、ステロイド投与した際のAPTT値の推移を見た。【成績】APTTによるLAの検出は、プラテリンを通常濃度で用いるより、20倍で用いると感度が上昇した。この20倍希釈プラテリンを用いたAPTTで、習流患者20名中2名が、また妊婦400名中4名がLA陽性と考えられた。ELISA法にて測定すると、習流患者はいずれも陽性であったが、LA陽性と判定された妊婦では陽性にならなかった。習流患者にプレドニンを投与すると、20mg/日ではLAは陰性にならなかったが、40mg/日では陰性化した。【結論】①20倍希釈したプラテリンを用いるAPTTは、LAの検出に有用である。②LAの頻度は、習流患者で10%、妊婦で1%であった。③LAを保有する習流患者は、ELISA法でも陽性となった。④LAを保有する習流患者には、十分なステロイド投与を行なうと、LAは陰性化する。

142 多変量解析による骨盤入口の数理的検討

日本医大

松本譲二、関谷隆夫、田中穂積、高橋 通、
菊池三郎

〔目的〕骨盤入口面の分類は視覚による主観的分類が主として行なわれている。私達は実用上容易に測定し得る新しい計測点を用い、多変量解析による客観的分類を行ない、これに基づき、重回帰式を用い入口面積を近似計算した。今回この計測法によりCPDの判定が可能かどうかを検討することで目的とした。〔方法〕前後径(apD)、最大横径(trD)、apDの後端よりapDの1/10点と9/10点での横径(pmpD, ampD)を新しい計測値とし、当医局過去10年間の骨盤X線像の118例についてクラスター分析によって分類し、また入口面積算出のための重回帰式を求めた。別の25例についてexternal checkを行った。また7例のCPDについて、無作意に注出した正常分娩例との間に判別分析を行った。〔成績〕入口面は9群に分類されたが、大半(93%)はIからIVの4群に属した。この4群に重回帰分析を行い入口面積推定の回帰式を求めた。 $R^2 > 0.92$ external checkにより7%以内の相対誤差にとどまった。ampD, 入口面積推定値(S), apD, ampD/pmpDの4変量による判別分析の結果、Sのみの場合よりMahalanobis distanceが大きく(0.29:5.63), 86%の正診率であった。(P<0.05)〔結論〕新しい計測点を用いて客観的に入口面を分類した。分類した群ごとに回帰式を求めたことにより推定誤差を減少することが可能となった。この新しい計測値と推定面積を用いることにより、入口面のみからのCPDの判別が86%の正診率で可能となった。コンピュータの普及によってこれらの数理的分析の臨床応用は容易となっている。